# 本連載における「翻訳」について ⑦

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
加藤　匡人　*Masato Kato*

前々回（7月）、前回（9月号）にわたって、政治学者のアーフィ・バドゥレディンの論稿を参照しながら、ハーバーマスの協同的翻訳論における「翻訳」の内実についての議論を確認した。とくに前回では、宗教的言語の「翻訳不可能性」の議論を取り上げ、ハーバーマスの唱える「翻訳」においては、宗教的言語でしか表現し得ない「翻訳不可能なもの」の存在が等閑視されていることに触れ、宗教的市民と世俗的市民が協働して翻訳に取り組む際には、その翻訳不可能性を引き受ける必要があるという主張を紹介した。

今回からは、この「翻訳不可能性」に関連する点として、著名な人類学者であるタラル・アサド（Talal Asad）が指摘する内容を取り上げていきたい。

タラル・アサドと「翻訳」

アサドは、『宗教の系譜―キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』（1993 = 2004）や『世俗の形成―キリスト教、イスラム、近代』（2003 = 2006）といった今や古典的名著となった著作で知られているが、その近著である『リベラル国家と宗教―世俗主義と翻訳について』（2018 = 2021）において、ハーバーマスの議論にも触れながら、宗教的言説の翻訳可能性と不可能性についても論じている。以下では、その議論の前提となるアサドの「翻訳」概念のとらえ方に触れた上で、それが宗教的言語の翻訳のあり方を理解するのにどのような示唆を持つのかについて論じていきたい。

まず、アサドにとっての「翻訳」は、これまで連載で紹介してきた論稿で使われる意味とは大きく異なる。アサドはこの著書の序論で、哲学者のヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の概念に触れ、「言語を使用することは、ゲームをするようなものであり、計算を行うことではな」く、「ある言語ゲームを理解することは、生活様式を理解することであ」り、「生活様式を理解することは、その言語が諸実践の中にどのように埋め込まれ、繋ぎ合わされているかが理解でき、特定の文脈における正しい言明を認識でき、ある状況においては明らかに思える言明に異なる解釈があり得ると理解できることを前提している」と述べている（アサド　2018 = 2021：8）。そしてその上で、以前にも参照したヤコブソンの「記号間翻訳」の概念と対比させながら、「言語」と「翻訳」について以下のように述べている。

> したがって、ヤコブソンの「記号間翻訳」の概念と私の見解は異なる。自然言語は、身体化された慣習を学ぶために不可欠であるが、それが最終的にもたらすものは、厳密に言えば、「非言語的記号体系の記号による言語記号の解釈」ではない。自己を涵養する慣習を翻訳として有意に記述することができたとしても、そうした慣習は（必ずしも）非言語的記号体系、すなわち意味の媒体ではない。主体にとって、それらは所与の伝統の中での生き方を学ぶ方法なのである。すなわち、言説的伝統（discursive tradition）は、単なる言語的過程ではない。それは同時に、そして第一義的には、共有された生活様式の構成員として獲得する習慣や感覚や行動に埋め込まれた、暗黙の連続性であり、ある時代から次の時代へと翻訳されるものなのである。
>
> （同上：12、強調点は原文ママ）

すなわち、宗教伝統にある「身体化された慣習」は意味を伝える媒体としての非言語的記号体系ではなく、「共有された生活様式の構成員として獲得する習慣や感覚や行動に埋め込まれた」ものであるので、記号体系としての自然言語とイコールで置き換えれるものではない、とアサドは論じているのである。

ちなみに、この引用した行（くだり）をより明確に理解するには、「言説的伝統」の概念の意味を明確にしておく必要があるだろう。この著書の訳者である苅田（かりた）真司は、アサド自身の言葉を引きながら、この概念を次のように説明している。

> この概念の意味は、アサドによれば、「善なる行動、思考、感覚を繰り返し演じること（中略）によって、言語が、生きている身体の感覚を指示し、正当化し、そこに浸透していく方法に焦点を当てること」である。アサドは、この言説的伝統は、「宗教の同義語」であり、「世俗的自由の欠如を意味している」とする。つまりそれは、世俗主義的で近代的な空間に対置されるものなのである。（苅田　2021：240）

苅田の解説によれば、宗教の同義語として使われるこの「言説的伝統」という用語を理解するには、ポイントを三つ押さえておく必要があるという。それは、（1）「それが単なる言葉や行為ではな」く、「生活様式と一体化した言葉を自らに体化することによって、自己を特定の感性を持った主体として形成していくこと」、（2）「それが『伝統』であるということ、つまり、過去から引き継がれたものであるということ」、そして（3）「伝統に基づいて自らを徳ある主体として涵養していくに際して、共同体の助けが必要であると考えられていること」の三つである（同上：240 ～ 241）。

このように眺めると、ある「宗教」すなわち「言説的伝統」の慣習を言語で記述するということは、その伝統の中で「過去から引き継がれ」て「生活様式と一体化した言葉」を、認知的に理解可能な記号体系に切り縮めるような行為とも言えるだろう。苅田によれば、アサドの理解の根底にあるのは、「翻訳概念が前提としている『メッセージ』と『媒体』の分離可能性」に対する批判であり、「言語（や行為）は単なるメッセージの媒体ではなく、ヴィトゲンシュタインのいう『生活形式』と密接に関わっている」という点なのである（同上：237）。

このような解説を踏まえた上で、アサドが「翻訳」をどのように説明しているかを見てみよう。

> ある自然言語から別の言語へのあらゆる翻訳は、いや、同一言語内の翻訳でさえ、自明かつ深い意味において、変形（transformation）である。（中略）翻訳（というより、ヴィトゲンシュタインが言語ゲームと呼んだものにおけるあらゆる言語の使用）は、意味をなす特定の単語列が他の単語列によって置き換え得るような、純粋に認知的な行為ではない。それは、ある文脈の中で、特定の音や像、そこから生じる感情を想起させる表現の複合体であり、行動や態度を現実化するものである。（同上：13 ～ 14 、強調点は原文ママ）

［引用文献］

苅田真司「訳者あとがき」タラル・アサド（苅田真司訳）『リベラル国家と宗教―世俗主義と翻訳について』人文書院、2021 年。

タラル・アサド（苅田真司訳）『リベラル国家と宗教―世俗主義と翻訳について』人文書院、2021 年。